

イスラエル旅行で友人となった稲垣さんのブログを読み、江戸後期の漂流民が国交のなかったロシア、アメリカ、フィリピン等の外国人とコミュニケーションを果たしたこと、同時に漂流先でキリスト者になったため、幕府のキリシタン禁制により、帰国できなかった人々がいることを知りました。歴史も知らず、キリシタンについてもほとんど無知であった私は慌てて、三浦綾子著「海嶺」を読みました。それが音吉(1817-1867)との出会いでした。



音吉(林阿多)像 1849  
(国立公文書館蔵)

「海嶺」は音吉の少年期から帰国が叶わなかった青年期までを扱っています。音吉はお伊勢様の膝元で生まれ育ち、賢く優しい心根で誰からも愛される少年であると同時に、船乗りとして腹が座って冷静沈着な行動ができる真面目な労働者でもありました。遭難に合い、絶望的な漂流の末、救出されました。音吉は漂流中、真剣に神仏に助けを求め、祈っています。揺れ動く心理を著者は見事に描いています。救出され、イギリス人の宣教師に保護され、音吉たちは、葛藤の末、キリスト教の洗礼を受けました。それゆえ故国からも追い払われる運命にもなりました。けれども、その信仰に従い、終生クリスチャンとして生きました。その点で特に音吉に惹かれました。音吉の 20 年後の世代のアメリカ彦蔵(1837-1897)も同様に漂流民で、キリスト者になりました。彦蔵の自叙伝 The narrative of a Japanese を読みましたが、素直で賢い人物と感じつつも、音吉ほどには魅了されなかったのは「海嶺」を読んだせいでしょう。

シンガポール出発の前に稲垣さんから春名徹著「につぼん音吉漂流記」を読むように勧められました。春名徹は音吉が、日本に3度やって来た折(1837年 米商船モリソン号、1849年 英国軍艦マリナー号、1954年 英国艦隊ウインチェスター号)に、幕府の役人に記録された文書や、関連する資料を丁寧に掘り起こしています。ペリー提督が漂流民を取引の道具としようとしたことに断固反対した音吉、英国の通訳として開国に一役買った音吉、漂流民の帰国を援助した親切な音吉を記しています。著者の指摘はとても興味深いものでした。それは幕末の武士階級の封建意識と、農民で、カタカナしか書けなかったけれども、コミュニケーションの能力を得て、時代を読み、世界の人間の駆け引きを肌で知った音吉の感性の対立です。結論部分から引用すると、

ヨーロッパとの接触がアジアにもたらした自立的な傾向を仮に近代とよぶならば、音吉に代表される〈庶民の近代〉と、福沢らに代表される〈為政者の近代〉とは、この時一瞬鋭く相まみえ、後者が前者を無視することによって、たちまちはなればなれになったといえる。〈庶民の近代〉に本質的に内在する親切、人間に対する優しさなどとは無関係な地点に、日本が近代国家を形成する…

とあります。為政者側は、身分の差にとらわれ、身分の低い人間の言葉や命を軽く見て、本質を見誤った、と分析されています。人間を大切にするのではなく、国家の秩序に従えとする意識から、幕末の指導者は抜けられなかったと言えるでしょう。それに対し、音吉は愛する妻、家族と平和に生きる道を選び、子に日本へ戻る夢を託して、シンガポールを終の棲家とする生活に帰って行きました。春名徹の「漂流記」は 61 頁に渡る註や、図版目録があり、丹念に資料にあたっています。そのため幕末の開国への道筋が、音吉の足跡と共に見えてくるような著作です。

今年が音吉没後 150 年、来年は明治 150 年です。音吉顕彰会が「幕末の日本に海外から影響を与えた男」としてホームページを開き、日本語、英語の両語で解説し、様々な企画をもって、音吉を世界に向けて紹介しています。ミュージカルや映画もあるといえます。今回、シンガポールへのツアーに参加し、会の皆様に親切にされ、多くを学べたことを深く感謝しています。